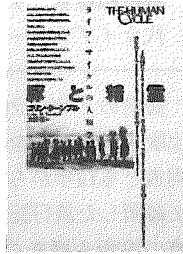


# 「資料紹介」

図書館の近着資料のなかから数点を選んで紹介します。

コリン・ターンブル著 大田  
至訳 豚と精霊：ライフ・サイ  
クルの人類学 東京 どう  
ぶつ社 1993年 342p.



奇しくも、本紹介執筆時に、  
著者の訃報に接した。肺炎のため  
1994年7月28日死去、享年69歳。偉大なアフリカニ  
ストの冥福を祈りたい。

異文化に拠った西洋近代批判の警世の書といえ  
ば、すでに同種の本はかなり存在しようが、本書がや  
や異質なものは、学術書というよりもむしろ私小説  
と呼ぶ方がふさわしい事例紹介にある。

ターンブルは本書で、ライフ・サイクルを子供時  
代、思春期、青年期、成年期、老年期の5期に区分  
して、「成長期に応じていろいろな価値観を学んでゆく  
ことは、すべての文化に共通である」とする。各々の  
時期において習得しうる人生の技法とは、羽化の技  
法、転成の技法、理の技法、営為の技法、存在の技  
法である。これらの事例に、長年の調査対象であつた  
ザイルの狩猟採集民ムブティを主として用い、インド  
のヒンドゥー文化にも時々触れてはいるが、それらよ  
りも重要な事例がターンブル本人である。彼の育つた  
イギリス社会では人生の技法の習得過程がいかにか  
阻害されているかを力説するために、著者の体験を  
赤裸々に開陳していく。本書執筆時に50歳台後半で  
、「やっと老年期にたどりついた」著者が、自らの来  
し方を振り返るために、ムブティとインドの聖者等  
を引き合いに出してきたとの印象を受ける。

彼は本書で、「精霊」を感受しうる生活を理想とす  
る。「精霊」は本書の主題であり、種々の表現で説  
明が試みられているが、結局のところ「直観的な認  
知によってしか理解しえない生命の本質」という内  
実が、読者の感性でしか捉え得ないであろう。その  
「精霊」との結びつきを失ってしまった人間が「豚」  
である。訳者の太田氏は、この「対語」を訳書の  
タイトルとされた。「訳者あとがき」で太田氏が紹  
介しているように「遺書のような雰囲気」の漂う書  
物である。(池野 旬)

森 康成著 アフリカ生活誌 東京 学文社  
1993年 326p.

著者は高校で地理を教える傍ら世界各国をヒッチ  
ハイクで旅行して歩き、訪れた国は140カ国を超え  
るといふ。その旅行の記録の中からアフリカ諸国に  
関わることを集めたのが本書である。一般には国別  
に書かれる旅行記が多いが本書はトピックを主題別  
に分類して配列している。目次の分類項目は「ア  
フリカの水」「食」「交通」「住居」の4分類。さ  
らに「住居」の項は「とんがり屋根の家」「草ぶ  
きの家」「土造りの家」「町の家」「砂漠のテ  
ント」「島の涼しい家」と分けている。この方式  
だと各地の状況が横並びで比較できるのが興味  
深い。

「赤道をこえる船」の項をみてみよう。コンゴ川  
(ザイル側ではザイル川と呼ぶ)の川下りである。  
著者の旅行は現地の人々の生活を直接体験しよう  
というもので、川下りもまずは8日間の食糧の調  
達から始まる。しかし川下りする人々が買い占め  
てしまったのかパンを買うのにもひと苦労、よう  
やく船に乗り込む。この船も著者によれば「日本  
では想像もつかないもの」ですわるスペースを確  
保するのがやっと、さすがの著者も「出発の前か  
らいやになってしまった」が、程なく何漕かの船  
が繋がられていよいよ出発。時々立ち寄る村々  
で運がよければコーヒーが飲めるが、食物はほ  
んど手には入らない。雨季でもありパンは数日  
するとかびてくるので干さなくてはならない。船  
にはパンとピーナッツバターを売るおばさんたち  
もいる。

筆者は、こういう困難とも思われる旅を経験か  
ら養った勘でこなしているのだから。しかし決し  
て先入観に囚われたりはしていない。目新しいこ  
とに会うとまずは現地流を真似する。失敗もある  
がそれがまた著者には楽しみとなる。こうして読  
者は自身が体験することのできない「旅行感  
覚」を一緒に楽しめるわけである。

(鈴木陽子)

オスマン・サンコン著 サ  
ンコン少年のあふりか物語  
東京 講談社 1993年  
117p.



初出は児童向け月刊誌の『小学2年生』。学校にあがってまもない子どもたちがこの作品の最初の読者となったはずである。著者は日本ではタレントとして活躍中のサンコン氏であるが、作品の中ではその小さな読者たちと同じ小学2年生のサンコン君に戻って、一人称で語りかけている。

舞台は西アフリカのギニア。サンコン君は家族の決まりにしたがって、小学校にあがった日から3羽のニワトリ、ヒツジ3頭、ヤギ2頭の世話をまかされる。毎朝、日の出にあわせて起き、離れた井戸まで水をくみにいき、仕度をすませたあと1時間以上も歩いて学校へ通う。その上にこういう毎日の仕事をこなすのだから、もちろん「かなりいそがしい」。けれども、苦勞しながら世話を続けていると「かわいくて、めんどろだなんて思わなくなってくるからふしぎ」だと語るサンコン君が特にかわいがっているのがメフィーボと名づけられた1頭のヒツジである。草原にたくさんのヒツジが放されていて、メフィーボならすぐに見分けることができる。

けれども、この「かわいくて、いうことをよく聞くし、すごく元気がいい」大好きな友だちとサンコン君に別れの時がくる。サンコン君に妹が生まれ、イスラム教の決まりにしたがってメフィーボが屠殺されることになったのである。しかも、儀式の日までの一週間、メフィーボの最後の世話をし、儀式の当日にメフィーボをつれていくのはサンコン君の役目であった……。

平易な言葉とわかりやすい筋立てで、著者の育ったギニアの農村の暮らしが情感豊かに描かれていく。キャンピングカーでサハラ砂漠を旅してきたという画家の久我通世氏による、たくさんの暖かい色彩の挿し絵が物語をいっそう引き立てている。繰り返し読むのもいいものだが、話の続きを聞くのも楽しみだ。続編を期待したい。

(津田みわ)

ジェフリー・ハワード著 柴田都志子訳 サハラ  
砂漠縦断記 東京 図書出版社 1993年 394p.  
野町和嘉著 サハラ縦走 東京 岩波書店(同時  
代ライブラリー168) 1993年 315p.

後者の「サハラ縦走」は1977年に日本交通公社から出版されたものを改訂し写真を増補したものである。両書とも74年から75年にかけてサハラ砂漠を北から南に縦断した旅行記である。70年代初め頃よくサハラ砂漠の縦断や横断の冒険が行なわれたような記憶がある。

これら2冊の旅行記を比べると、旅行の手段が手押し車と自動車という違いがあるにせよ、日本人とイギリス人の相違が際立っているのが興味深い。ジェフリー・ハワードが牧師である点によっていっそう強調されるが、キリスト教という宗教を持った人間と、どちらかという宗教心に乏しい日本人とでは旅の感覚が異なっている。ハワードは手押し車で過酷なサハラを縦断している。彼にとってはサハラ砂漠である必要はなかったと思われるし、旅行記自体もサハラを舞台にした自己の内部に向かう旅であり、家族への思いやキリスト教への帰依を主題としている。他方、野町はサハラ砂漠の中毒者である。サハラの代わりにゴビ砂漠やアラビア半島の砂漠を旅行しても、サハラほどの自由を与えてくれる砂漠に彼は出会えないのである。

この2人の旅行者が相前後して同じキャンプ場に滞在している。サハラ砂漠の南部アガデスの町のドイツ人が経営するキャンプ場である。ハワードはただドイツ人が経営するキャンプ場と記しているだけであるが、野町はこのキャンプ場について、植民地時代からの白人至上主義を感じている。

野町の著書は写真が多く、読者にはサハラの風俗がよく見えるだろう。それに対し、ハワードの著書は、どちらかという彼自身の人間関係の闘いである。

(井村 進)

川端正久・佐藤誠編 新生南アフリカと日本 東京 勁草書房 1994年 249p.



1991年6月の南ア政府の آپルトヘイト法全廃によって、国際社会の対南ア経済制裁は解除の方向に向かった。

この経済制裁の一環として日本が課していた文化・教育・スポーツの交流禁止も91年7月に解除された。このことによって本書のような南アフリカとの共同研究が初めて可能となった。

本書は関西在住のアフリカ研究者たちによる南アフリカ・ウェスタン・ケープ大学南部アフリカ研究センターとの共同シンポジウム（1993年8月開催）の成果に基づいている。同シンポジウムのテーマは「南部アフリカ諸国における経済協力と自立的発展への展望」であり、日本側および南アフリカ側研究者が、三つのサブ・テーマの下に報告した。本書はそれを基にして(1)現代世界と新生南アフリカ、(2)新生南アフリカの戦略、(3)新生南アフリカと日本、(4)草の根協力の展望の4部に再構成され、合計11の報告が収録されている。

これらのサブ・テーマからも明らかのように、本書の主題は新生南アフリカの今後の動向、南アフリカと南部アフリカの関係、日本と南アフリカおよび南部アフリカの関係の展望など、優れて現代的関心と将来の展望を得ることに置かれている。しかも、シンポジウムが開催されたのは1994年4月の南ア制憲議会選挙前であり、マンデラ新政権の誕生は予測されたものの、外交・国内政策については明らかとなっていなかった。まして日本と南アフリカの関係の将来に関しても明確になっていない段階で、多分にオプションを含んでいるが、しっかりとした現状分析を踏まえ、かつ多面的に問題を捉えようとしている。その意味で本書は、今後の日本と南アフリカおよび南部アフリカの関係を考える際の重要な文献として高く評価することができる。

(林 晃史)

楠瀬佳子著 南アフリカを読む——文学・女性・社会 東京 第三書館 1994年 411p.

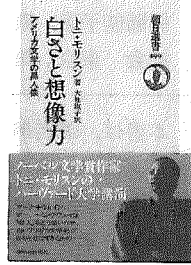
本書は、著者がこの数年間に雑誌や新聞に発表してきた58編にのぼる論稿をまとめたものである。著者自身の言葉を借りれば、これらの論稿は、南アフリカ共和国においてほぼ340年にわたって続けられた白人によるアフリカ人の支配と抑圧の歴史が終焉を迎えるまでの過程でくりひろげられてきた「南アフリカの人びとの闘いや、その闘いに連帯してきた人びとの意識を文学や演劇を通じて理解しようとする」中から生まれたものである（403ページ）。他方、著者は、教育を受ける機会や出版のチャンスが少なく、作家として生計を立てることが難しく、作品を書く時間に恵まれないなどといった数々のハンデと闘ってきたアフリカの女性作家に焦点をあてることにより、「やさしい母親」とか「多産で自己犠牲を厭わずなんでも受け入れる女性」というステロタイプの女性像を描いてきた男性作家（12ページ）に批判の目を向けることも忘れていない。

著者はまた、アフリカ人作家が来日した機会を逃さないだけでなく、自らアフリカやヨーロッパ各地に彼らを訪ねて、直接対話を重ねることによりアフリカ文学の行間を読む姿勢を一貫して持ち続けており、それが本書の内容に厚みと大きな説得力を与えている。さらに本書の付録として、長年にわたりケニア政府の弾圧と闘い、著者も敬愛してやまないグギ・ワ・ジオンゴの未公刊の戯曲『母よ、我がために歌え』を詳細な解説を付して紹介することにより、アフリカ人作家が闘ってきた対象が国家の権威であったことを暗示している。

とはいえ、国家がなぜアフリカ人作家、特に女性作家の作品に厳しい検閲を加え、時には発禁処分を行なったのかという問題が、そこに描かれた女性像だけでなく、言語観や人間観を含む多角的な視点から考察されていない点がややもの足りない。

(細見真也)

トニ・モリスン著 大社淑  
子訳 白さと想像力：アメ  
リカ文学の黒人像 東京  
朝日新聞社（朝日選書499）  
1994年 161+viipp.

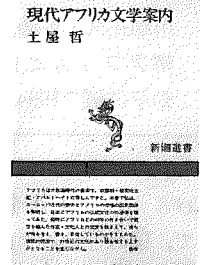


著者トニ・モリスンはアメ  
リカで活動する作家・批評家  
である。1988年にピューリッツァー賞を、93年にはノ  
ーベル文学賞を受けている。本書の目的は、訳者がつ  
けた副題にあるように、アメリカ文学の中の黒人像の  
検討にあるが、その切り口が独創的である。著者の関  
心は、黒人の作ではない文学の中で、黒人はどのよう  
なイメージを喚起する存在として描かれてきたのか、  
という点にあった。

いくつかの文学作品の検討を通して著者は、非黒人  
作家の作品に見られる「アフリカニズム」——「アフリ  
カ民族が表すようになった表示的かつ暗示的な黒さ、  
それから、これらの人々についての意見、思いこみ、  
理解の仕方、ヨーロッパ中心の学問につきものの誤解  
の総体を指す」（本書 26ページ）筆者独自の用語——  
を指摘する。しかし、モリスンの目的は、このような  
「文学上の黒人性」を人種差別的であると批判するこ  
とにあるのではない。白人作家であれ黒人作家であれ、  
アメリカ文学においては、明示的に語るか否かを問わ  
ず、すべての文学は人種的（「人種差別的」とは違う）  
であることから逃れることができないのだと彼女は言  
う。そして、人種的であることが文学と文学的想像力  
にもたらした帰結の分析——モリスン曰く、重要であ  
りながらもまったく着手されてこなかった研究——を試  
みているのである。

いわゆる地域研究の分野では、対象地域に対するロ  
マンチズムが良かれ悪しかれ問題にされることが多  
いが、それと似たような意味で、筆者の言う「アフリ  
カニズム」が、アフリカ研究に与えてきた影響も実は  
かなり大きかったのではないだろうか。本書はあくま  
でアメリカ文学を対象とした文芸批評であるが、「黒  
人」を媒介にして、アフリカ研究のあり方にまでその  
問題提起の射程を伸ばしている。（佐藤 章）

土屋 哲著 現代アフリカ  
文学案内 東京 新潮社  
（新潮選書） 1994年 254p.



著者は早くからアフリカ文  
学のもつ力を発見し、それを  
楽しんできた。そしていま、  
科学技術と物質文明の波にあ  
おられ、生きるための根源的な力を求めて模索してい  
る現代日本人のために、長年の研鑽をこの本に結晶さ  
せた。アフリカ文学の力は「自然」に深く根ざした思  
想からくる。もともと英文学専攻だった著者の目をア  
フリカへ転じさせたのは、アフリカ文化の持つ異質な  
力強さでもあったが同時に、日本文化との類似性でも  
あった。

アフリカ人のコスモロジーの基本——宇宙の森羅万  
象にはすべてそれぞれの持てる力があり、それらが完  
全に対等な存在として、たがいに働きかけ合う中で、  
人間もその一構成メンバーであり、それ以上でも以下  
でもないという考え方——は、日本人の伝統的な精神  
と大いに共通するものであった。日本もアフリカも、  
無文字社会から出発し、口承文芸の伝統があったり、  
祖先との共生、タテ社会・家族共同体と自我の関係の  
問題なども共有している。

第一部は導入部。読者はいきなり熱帯雨林に囲まれ  
たヨルバランドで、「夜」のもつ深い意味を体験させら  
れる。第二部はアフリカ文学の重要テーマの一つであ  
る、ヨーロッパ人の進化論や選民思想に対するアフリ  
カ人の反抗を扱う。第三部は作家論。あらためてアフリ  
カ文学の豊かさを実感させられる。多くの作家と親  
交を深める著者の人柄と好奇心は貴重である。第四部  
は日本とアフリカの文芸の共通領域について考える。  
「自然」と向き合う俳句の世界がその一例である。

各部のテーマをヨコ糸とし、作家と作品というタテ  
糸が貫いて、構成上多少錯綜した印象を受けるが、ア  
フリカの多様な文学を、尽きることない情熱の持主に  
語らせれば、宝石箱をひっくり返したような本になる  
のも自然のなりゆき。これ以上の案内人は望めまい。

（丹莖靖子）